

# 副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層 ——タブン/タイテイとの並行性——

杉 村 泰\*

キーワード: キット, カナラズ, モダリティ階層, 一回的文脈, 反復的文脈

## 要 旨

本稿は「モダリティ」の観点から日本語副詞「キット」と「カナラズ」の意味分析を試みたものである。従来、「キット」と「カナラズ」は「陳述副詞」あるいは「話し手の主観的態度を表わす副詞」として位置付けられ、その「蓋然性」の違いや「推量的機能」「習慣的機能」について論じられてきたが、その違いはいまだ明確にはされていない。

これに対して、本稿では少し角度を変えて考察し、2語とも蓋然性に関わるが、その呼応する成分のモダリティ階層が異なることを主張する。すなわち、「キット」は話し手の判断と関わり、「カナラズ」は命題内容と関わりと考えるのである。そして、この呼応する成分のモダリティ的な階層の違いが、二次的に2語のさまざまな意味的な差となって現われていることを明らかにする。また、こういった現象が「キット」と「カナラズ」との間においてだけでなく、「タブン」と「タイテイ」との間にも並行してみられるものであることを指摘する。

## 1. はじめに

本稿は「モダリティ」の観点から日本語副詞「キット」と「カナラズ」の意味分析を試みたものである。従来、キットとカナラズは「陳述副詞」あるいは「話し手の主観的態度を表わす副詞」として位置付けられ、ともに「蓋然性」と関わる表現とされてきた。そこでは、主として2語の意味的な差、例えば「蓋然性」の違いとか、「推量的機能」および「習慣的機能」の現われ方の違いを明らかにすることに焦点が当てられていた。しかし、2語の違いはいまだ明確な形で説明されるには到っていない。その原因は、先行研究では2語を同じモダリティ階層に属する副詞であると捉えていたためである。

これに対して、本稿ではこれまでの研究とは違った角度から2語の違いの分析を行った。すなわち、2語はその呼応する成分のモダリティ階層が異なると考えたのである。その結果、キット

\* SUGIMURA Yasushi: 北京第二外国語学院日本語学部外国人教師。

は話し手の真偽判断と、カナラズは命題内容と呼応することが分かった。このことは、キットとカナラズがモダリティ的に異なる階層に位置することを示している。この階層の違いが、2語のさまざまな意味的な差となって現われているのである。以下、キットとカナラズの意味的・統語的な違いを、例文を挙げながら論証していくことにする。

## 2. 考察の範囲

キットとカナラズはその表わす意味が似ており、各種の国語辞典でその意味記述に、メタ言語として互いの語が使用されている。一例として『講談社日本語大辞典』の記述を示しておく。

かならず〔必ず〕(副) ① きっと。たしかに。まちがいない。surely [用例] 人間は一死ぬ。一間にあうように行きます。② いつも。きまって。always [用例] 会えば一けんかだ。戦えば一勝つ。

きつ-と〔屹度・急度〕(副) (「きと」の転) ① たしかに。まちがいない。必ず。certainly [用例] 一来る。② 急に態度が厳しくなるようす。sternly [用例] 一にらみつける。③ 厳しく。きりりと。[用例] 一申しつける。④ [古語] すぐに。とっさに。[用例] 一思ひだして(平家・九・生ずきの沙汰)

このうち、キットの②~④は行為の様態を表わすもので、話し手の真偽判断を表わす①とは意味が異なっている。本稿では②~④のようなキットは考察の対象とはせず、①の場合のみを対象とすることにする。

辞書の記述にもあるように、キットとカナラズは類義語として捉えることができる。このことは、次の例文からも確認することができる。

(1) 灯の連なる名古屋の街を窓に見入りながら、いつかはきっと、あの女に会える、必ず会ってみせる、と思った。(松本清張「黄色い風土」、劉(1996: 38)より)

この文において、キットとカナラズを入れ替えても、その表わす意味はほとんど変わらない。このことは、この2語が意味的に近いことを示している。

しかし、次の例文ではこのような入れ替えはできない。

(2a) 彼はキット君のことが好きなんでしょう。

(2b) \*彼はカナラズ君のことが好きなんでしょう。

(3a) 君は出された料理はカナラズ残さずに食べるんだね。

(3b) \*君は出された料理はキット残さずに食べるんだね。

このような文の存在から、キットとカナラズは意味的に近いとはいえ、全く同じ意味を表わすわけではないことが分かる。

本稿は主として、この2語の意味的・統語的な違いを分析するものであるが、その際、これら

の副詞と意味的・統語的に関連のある「タブン」「タイテイ」等の副詞についても視野に入れて論じていくことにする。このことは、将来副詞の体系的な記述をするための重要な布石ともなるであろう。

### 3. 先行研究と本稿の分析の視点

キットとカナラズの類義語分析を行った先行研究として、国広他(1982)、森本(1994)、劉(1996)が挙げられる。本章ではその要点を整理し、本稿での分析の視点を定めることにする。

はじめに国広他(1982)をみていこう。国広他(1982)は、2語の分析の予備段階として、一つの文には話し手の態度を表わす部分(心的態度)と、その対象となる部分(命題)との区別のあることを論じた。そして、「客観的对象」をP、命題をQ、「成立する」を「である」と言い換えて示すと、命題Qは一般に、[Qである]という構造を持つ(同書: 187)とし、キットとカナラズはどちらも「〈命題の成立する度合についての話し手の主張を示す〉働きをする」(同書: 187)とした。その上で、「キットQ」の意味は「主観的根拠にもとづいてPである」であり、「カナラズQ」の意味は「Pでないことがありえない」と規定した。

また、国広他(1982)は次の二つの例文の容認度の違いを根拠として、「キットQ」は「既成の一回的事実」を示す命題に使えるが、「カナラズQ」は使えないことを指摘した。

(4a) あの人はキット結婚したんですよ。

(4b) \*あの人はカナラズ結婚したんですよ。

国広他(1982)は、(4b)は「あの人が結婚した」ことを認めればそれ以外の可能性はないからカナラズが使えない(同書: 193)のであると分析した。

次に森本(1994)をみていこう。森本(1994)は副詞のカテゴリーを分類する中で、キットとカナラズを「話し手の主観を表わす副詞」として位置付けた。それらの副詞はさらに平叙文と共起するか、命令文と共起するか、「だろう」「らしい」「う/よう」構文と共起するか、あるいは同じ平叙文でも現在文で現われるか過去文で現われるか、といったテストによって、いくつかのサブカテゴリーに分類した。キットとカナラズはそのうちの一つ、「述べられる行為や状態の実現についての蓋然性に関する判断を担っている」(同書: 63)とされるものに属し、その中でもとくに蓋然性の程度の高いものとして位置付けられている。

森本(1994)は、カナラズに「推量的機能」と「習慣的機能」を認め、過去平叙文では後者の読みにしかならないと指摘している。それは次のような例文を根拠にしている。

(5a) まりこはかならずここを通る。

(5b) わたしの予測ではまりこはかならずここを通る。(推量的機能)

(5c) まりこはかならずここを通る。それで店の人が彼女の顔をおぼえてしまった。(習慣的)

機能)

(6) P: まりこは少しお金があるとかならずバラを買った。

Q: それが彼女の習慣だったの。

P: うん。

一方、キットについてもカナラズに似た性質があるとして、次の例文を挙げている。

(7) まりこはお金があるときっとバラを買った。

(8) まりこはお金があるときっとバラを買う。

ただし、(7)(8)のような用法は、現在の日本語では書き言葉に限定されるとしている。

また、森本(1994)は、2語が命令文に使われた場合、ニュアンスの違いとして、「直観的に言うと、「きっと」では、話し手は行為を実現させるという自分の期待を強調する。また、「かならず」はその行為が確実に行われることを強調する」(同書: 175)とした。

最後に劉(1996)をみていこう。劉(1996)はキットとカナラズを分析する前提として、「命題」と「モダリティ」の区分、さらにはモダリティのサブカテゴリーの区分を行った。そして、キットとカナラズを「話し手の確信度を表わす副詞」の中に位置付け、モダリティに関わるものであると捉えた。

そして、ニチガイナイ、ハズダ、ダロウ、カモシレナイといった文末表現との共起関係を調査し、その結果、カナラズは前三つの比較的強い確信度を表わす表現と共起し、キットはそれに加え、弱い確信度を表わすカモシレナイとも共起することから、話し手の確信度はカナラズよりもキットの方が低いと指摘した。

さらに劉(1996)は、森本(1994)の「推量的機能」と「習慣的機能」についても言及した。ここでは、カナラズには森本(1994)の指摘の通り、2通りの読みが可能であるが、キットは推量の読みにしかならないと論じている。その理由は、次の例文においてカナラズをキットに置き替えることができないためであるとした。

(9) 偽名の手紙を、秋田文作にあてて四日に一度はかならず送った。(松本清張「危険な斜面」)

また(7)の文は、日本語のネイティブ・スピーカーの判断では不自然であると判断されたと述べている。

ここまでで、キットとカナラズの類義語分析を行った三つの先行研究の要点を整理してきた。これによって、この2語を分析する際の論点が明らかとなった。その第一点は、この2語が「モダリティ」あるいは「命題」とどう関わり合うのかを明らかにすることである。第二点は、「蓋然性」に関してどう捉えるかということである。第三点は、「推量的機能」と「習慣的機能」の現われ方について考察することである。

以下、この三つの論点に沿って、キットとカナラズの意味分析を行っていく。結果としては、

キットとカナラズは先行研究の指摘とは違って、モダリティの階層が互いに異なること、蓋然性は2語を区別する第一義的な要因ではないこと、「推量的機能」と「習慣的機能」の意味の分析により、キットとカナラズおよびその他の関連する副詞が一つの意味的な連続体をなしていることを明らかにしていく。

#### 4. モダリティとの関係

##### 4-1. 陳述, 誘導, モダリティ

キットとカナラズは、従来国語学の世界では、伝統的に「陳述副詞」(山田 1936; 時枝 1950; 橋本 1959)または「誘導副詞」(渡辺 1974)と呼ばれるものの中に位置付けられてきた。「陳述副詞」という概念は、研究者によって分類基準や対象となる語の範囲に異同はあるものの、特定の文末表現と呼応する副詞であるとされる点で共通している。例えば、「もし」といえば「～なら」のような仮定表現と、「決して」といえば「～ない」のような否定表現と呼応していると捉えたのである。とくに時枝(1950)は「詞」と「辞」を区別する中で、「辞」を修飾する副詞を「陳述副詞」としたが、これは当を得た考え方であり、後の研究に有益な示唆を与えた。

とはいえ、これらの分類には恣意的な部分も多く残されている。例えば山田(1936)は、「述語に断言を要する」陳述副詞のうち、「肯定を要するもの」として、カナラズ、モットモ、ゼヒ、マサニ等の語を所属させた。しかし、カナラズ、モットモ、マサニが話し手の命題に対する判断を表わしているのに対し、ゼヒは話し手の聞き手に対する態度を表わしているといった違いがある。表面的に同じ「肯定の断言」と呼応するといっても、その呼応相手の性質は大きく異なっているのである。

渡辺(1974)は、独自の「職能」という観点から、誘導の職能を持つ「誘導副詞」という概念を立てた。例えば「もし」や「決して」は、渡辺(1974: 134)では、「真の仮定表現や否定表現に先行して、その真の仮定表現や否定表現を予告し導き出す」という職能を持つ副詞であるとした。

一方、言語学の世界では、「モダリティ」という考えから副詞の研究が進められてきた。中右(1980)は、「命題」を「話者が切り取った現実世界の状況(出来事, 状態, 行為, 過程など)」(同書: 159)、「モダリティ」を「発話時における話者の心的態度を叙述したもの」(同書: 159)と規定し、副詞には命題の内側にある「命題内副詞」と、命題の外側にある「命題外副詞」との二つがあるとした。中右(1980)はこの二つの副詞を機能的にさらに下位分類した。

命題外副詞…(1) 価値判断の副詞, (2) 真偽判断の副詞, (3) 発話行為の副詞, (4) 領域指定の副詞

命題内副詞…(1) 時・アスペクトの副詞, (2) 場所の副詞, (3) 頻度の副詞, (4) 強意・程度の副詞, (5) 様態の副詞

この分類を先の陳述副詞、誘導副詞と対照してみると、多くの陳述・誘導副詞は命題外副詞に対応するが、ゼンゼン、ケッシテ、マツタク、タトエ、カリニ(モ)といった副詞は、命題内副詞の(4)の中に分類されている。これは、中右(1980)のモダリティの捉え方が、「瞬間的現在時の話者の心的態度」(同書: 159)に限られているためである。本稿で考察の対象とするキットとカナラズは、命題外副詞の(2)に分類されている。

キットやカナラズが命題に属するのか、モダリティに属するのかということは、モダリティの範囲をどう規定するのかによって変わってくる。3. で取り上げた国広他(1982)が、キットとカナラズを命題の中に位置付けたのは、モダリティの範囲を狭く規定したためである。いずれにせよ一ついえることは、キットもカナラズも、命題に入るにせよ、モダリティに入るにせよ、文末の特定の成分と呼応していることだけは確かであるということである。

その一方で、益岡(1991)は、モダリティに階層的構造のあることを認め、その領域を広く捉えた。益岡(1991: 34)はモダリティを「表現者の表現時での判断・表現態度を表す要素」と規定した。益岡(1991)のモダリティのうち、本稿で関係するのは「真偽判断のモダリティ」と呼ばれるものである。これは「対象となる事柄の真偽に関する判断を表す」(同書: 51)もので、核要素としてダロウ、ラシイ、ヨウダ、カ等が、呼応要素としてタブン、ドウモ、イッタイ等が含まれるとされている。

益岡(1991)は、呼応要素と核要素が命題の前後を挟み、より上位のモダリティ成分が、さらにそれを外側から挟みこんでいくといったモダリティ観に立っている。この考え方は本稿での分析にも有効なものである。ただし、どの要素とどの要素が呼応しているのか、形式的に外側にある成分が本当に上位のモダリティ成分なのかといった点で、なお検討の余地が残されている。

#### 4-2. 分 析

ここでは、キットとカナラズがそれぞれどのような文末成分と呼応しているのかを検討していくことにする。まず次の二つの例文を比べてみよう。

(10a) 彼はキット来る。

(10b) 彼はカナラズ来る。

両文ともその表わす意味に大差が感じられないであろう。文末成分は「来る」一語のみであるため、一見キットもカナラズもともに「来る」と呼応しているかのように見える。しかし、稿者および数人の日本人の語感では、(10b)がそのままの形で自然にいえるのに対し、(10a)は文末に「来るだろう、来るさ」のように、もう一つ成分を付加させたいような印象を受ける。仮に(10a)が成立するとすれば、その文末にはストレスを置いて発音されるように思われるのである。

また、次の二つの例文を比べてみよう。

(11a) ?[彼がキット来る]コトを信じている。

(11b) [彼がカナラズ来る]コトを信じている。

カナラズがコトの内部に収まるのに対し、キットはコトの内部に収まりにくいことが分かる。これらの事実から、一つの仮説が立てられる。それは、キットとカナラズとでは、呼応する文末成分のモダリティ階層が異なる、つまりキットは「ダロウ」のような話し手の真偽判断を表わすモダリティ成分と、カナラズは「来る」のような命題内容と関わっている、すなわち2語は異なるモダリティ階層に属しているという考え方である。

命題に近い成分は客観的なものである。森本(1994)は、カナラズは話し手の主観を表わすとしているが、次の例文のカナラズは客観的な内容であると考えてよいであろう。

(12) 彼は来ると言ったらカナラズ来る男だ。

たしかに、「来る」度合いを「カナラズ」であると判断したのは話し手の主観による。しかし、これを「主観的」とであるというならば、

(13) 彼はイツモうちの店に来る男だ。

という文の「イツモ」も話し手の判断によるものであり、モダリティに属することになる。しかし、「イツモ」は中右(1980)の分類したように、命題内副詞(頻度の副詞)とするのが適当である。「主観的」か「客観的」という区別は相対的なものであるが、ここでは(12)のカナラズも(13)のイツモも、「表現時」から独立した客観的な内容を表わすものであると考えたい。(12)のカナラズをキットに置き替えると容認度が落ちるが、これはキットが主観的な表現であるためであると考えられる。

(14) ?彼は来ると言ったらキット来る男だ。

キットとカナラズのモダリティ階層が異なることは、次の文代名詞化のテストからも窺うことができる。「それ」に含まれるものが客観的な成分である。

(15a) A: 彼はキット来ますよ。

B: それは本当ですか。

(15b) A: 彼はカナラズ来ますよ。

B: それは本当ですか。

自然な読みでは、(15a)の「それ」は「彼は来る」を指し、(15b)の「それ」は「彼はカナラズ来る」を指す。このテストからも先の仮説の支持されることが分かる。

さて、益岡(1991)は、コトの内部に入らないものを一次的モダリティ、コトの内部に入るものを二次的モダリティと規定した。この規定に従えば、キットは「真偽判断を表わす一次的モダリティ」ということになる。カナラズは益岡(1991)の類分けでは位置付けが難しいが、「命題」と「二次的モダリティ」の中間に位置し、意味的には真偽判断を表わす「キット」と頻度を表わす「イツモ」との間にあり、この2語と連続的につながっているものと考えられる。「連続性」については7.において考察する。

### 4-3. タブンとタイテイ

4-2. では、キットとカナラズとの間にモダリティ的な階層の違いのあることをみてきた。ここでは、他にも同じような現象を示す副詞のあることを指摘し、先の仮説が一般性のある考え方であることを主張する。

ここで取り上げる副詞は「タブン」と「タイテイ」である。まず、『講談社日本語大辞典』の記述をみておこう。

たい-てい [大抵] ㊦ (副) ① たぶん. おそらく. probably [用例] ーだいじょうぶだろう.

② ほどほど. [用例] うそもーにしる.

た-ぶん [多分] ㊦ おそらく. たいてい. おおかた. probably [用例] ー駄目でしよう.

この2語もキットとカナラズの場合と同じように、その意味記述に互いの語をメタ言語として使用しており、類義語として意識されている。

ところが、次の例文からも分かるように、タイテイはコトの内部に収まるが、タブンはコトの内部に収まらないという違いがある。

(16a) ?[彼はタブン出席する]コトが分かった.

(16b) [彼はタイテイ出席する]コトが分かった.

また、文代名詞化のテストにおいても次のような違いをみせる。

(17a) A: 彼はタブン来ますよ.

B: それは本当ですか.

(17b) A: 彼はタイテイ来ますよ.

B: それは本当ですか.

(17a)の「それ」は「彼は来る」を指し、(17b)の「それ」は「彼はタイテイ来る」を指す。このような現象の観察から、キットとタブン、カナラズとタイテイは統語的に同じ性質をみせることが分かる。

## 5. 蓋然性

### 5-1. 蓋然性の高さ

キットとカナラズは蓋然性を表わす文末表現と共起することが多い。森本(1994)や劉(1996)は、ニチガイナイ、ハズダ、ダロウ、カモシレナイといった蓋然性を表わす文末表現との共起関係を調査した。森本(1994)は、キットもカナラズも蓋然性の低い「カモシレナイ」と共起しないことを根拠に、2語を蓋然性の高い副詞とした。これに対し劉(1996)は、次の実例を証拠に、キットはカモシレナイとも共起することを指摘した。

(18) きっと恐くなっちゃったのかもしれないな。(森村誠一「死野」)

劉(1996)はこの事実を理由として、話し手の確信度はキットの方がカナラズよりも低いとした。

ここで問題にしたいのは、森本(1994)や劉(1996)の主張するように、キットとカナラズを蓋然性を表わす副詞として同列に扱っているということである。もし2語が第一義的に蓋然性の違いとして捉えるのであれば、先の(18)の文末成分「カモシレナイ」を蓋然性の高い表現「ニチガイナイ」に置き替えれば、カナラズが使えるはずである。ところが、次の例文は非文となる。

(19) \*カナラズ恐くなっちゃったニチガイナイな。

このことは、キットとカナラズが単に蓋然性の違いとして現われているわけではないことを証明している。

たしかに、キットもカナラズも蓋然性を表わす表現であるといえよう。そして、その蓋然性の高さは、キットよりもカナラズの方が相対的に高いように思われる。例えば「人間はいずれはキット死ぬ」というよりも、「人間はいずれはカナラズ死ぬ」といった方が、現実性が強く感じられる。しかし、だからといって、この二つの副詞は、単に蓋然性の違いとして扱うわけにはいかないのである。

また、表面上ある語とある語が一つの文に共起しているからといって、その2語が呼応の関係にあると結論することはできない。劉(1996: 40)では、次の例文において、下線をほどこした二つの成分が共起していることに注目した。

(20a) 自分を盗み撮りした人間がかならずいるはずだ。(森村誠一「雪の絶唱」)

(20b) なぜ、こんな場所を選ぶのだろうと静江は不安だった。駅の近所には喫茶店だってきつとあるはずなのに、わざわざ、こんなベンチを会話の場所にした田辺の気持ちが計りかねた。(遠藤周作「大変だア」)

みて分かる通り、(20a)においてカナラズとハズが共起している。しかし、このカナラズは「自分を～人間がいる」という命題を修飾しているものであり、直接ハズダとは呼応していない。

一方(20b)において、キットはハズダの外にある無形のモダリティ成分と呼応している。このことは、次のような過去文との共起制限から確認することができる。

(21a) そこにはカナラズ人間がいるはずだった。

(21b) そこにはカナラズ人間がいた。

(21c) \*そこにはキット喫茶店があるはずだった。

(21d) \*そこにはキット喫茶店があった。

キットは話し手の「表現時」での真偽判断を表わす主観的なモダリティ表現であるため、過去文では使用できない。ところが、ハズダには「ハズダッタ」という過去形がある。ということは、ハズダは「表現時」以前を表わすことのできる、より客観的で命題寄りの表現であることになる。このことから、(20b)のキットはハズダの外にある主観的な(無形の)モダリティ成分と呼応

していることが分かる。これに対し、(21b)のカナラズは「～いた」という過去文の内側に入るため、命題寄りの表現であるといえる。

以上、キットとカナラズはともに蓋然性に関わるが、それはこの2語を区別する第一義的な要因ではないことが分かった。蓋然性を比較する場合は、同じモダリティ階層のもの同士比べる必要がある。7.で少し詳しく論じるが、蓋然性の違いが第一義的に語の違いとして現われるのは、キットに対してはタブン、カナラズに対してはタイテイである。

## 5-2. 判断の根拠

キットもカナラズも蓋然性の高い表現である。先行研究では、話し手が何を根拠に高い蓋然性を持ったのかによって、キットとカナラズを区別しようとした。

国広他(1982)は、2.に示したように、キットは話し手の「主観的根拠」に基づいているとした。ところで、この「主観的根拠」という表現には問題がある。これに関して、劉(1996: 46)は、「推論の過程において、主観的であろうが、客観的であろうが、根拠自体は客観的なものであると考えられる」として、キットは話し手の「主観的根拠」ではなく、話し手の「主観的な判断」を表わしているのものであるとした。この見解は当を得たものであり、そう捉えるのが適切であろう。このことは、キットを「真偽判断のモダリティ」に位置付ける本稿の考えとも合致している。

他方カナラズについて劉(1996: 47)は、「話し手がある程度客観的な根拠に基づいて判断を下したものであり、キットよりも高い確信度をもっていることを表わすとした。しかし、2語の違いを「判断の根拠」の違いに求めると、次の例文でキットは使えるのにカナラズが使えないことの説明ができなくなる。

(22) 彼はもう十日も学校を休んでいる。そういえば十日前雨に濡れて少し頭が痛いと言って  
いたっけ。そうだ彼はキット(\*カナラズ)風邪をひいているんだ。

(22)において、話し手は彼が休んだ理由について判断を下している。その判断の根拠がいかに客観的なものであったとしても、カナラズを使うことはできない。それは、(22)が話し手の対象(「風邪をひいている」)に対する真偽の蓋然性を叙述した文だからである。

国広他(1982)は、3.でみたように、カナラズは「P(=客観的対象)でないことがありえない」ことを表わすとした。ところで、国広他(1982)では「命題」の領域を広く考えていた。本稿でいう「命題」はちょうど国広他(1982)の「P」の部分に相当する。そこで、国広他(1982)の規定を本稿のモダリティ観に則して言い換えると、カナラズは「命題内容でないことがありえない」と規定されることになる。

以上、「判断の根拠」が「客観的」なのか「主観的」なのかということと、キット/カナラズ  
の選択は関係がないということを論じてきた。本稿では、キットは「話し手の主観的な判断の確

信度が高いこと」を表わし、カナラズは「命題内容の状況が確実に成立すること」を表わす、と考える。キットよりもカナラズの方が蓋然性が高く感じられる原因は、こういったところにあつたのである。

## 6. 構文の意味とキット / カナラズの意味

### 6-1. 「推量的機能」と「習慣的機能」

先に 3. で述べておいたように、森本(1994)はキットとカナラズに「推量的機能」と「習慣的機能」のあることを指摘した。これに対し本稿では、そのような意味はキットとカナラズ自体にあるのではなく、それらの使われた「構文」に備わっているものであると考える。

ところで森本(1994)は、(6)の例文を根拠にして、過去平叙文では習慣の読みにしかならないとした。しかし、これはカナラズという一単語の問題としてではなく、「～タ」という過去平叙文の構文的特性の問題として取り扱うべきものである。すなわち、過去文と推量は意味的に相入れないため、過去文では推量的機能が働かないのである。過去のことを推量する場合、文末は「～タダロウ」のように現在形を取る。

(23) もしまりこに花を買いに行かせたら、カナラズ / キットバラを買っただろう。

現在文では推量的機能も習慣的機能もともに働くが、それは「構文」に備わった意味であり、キットやカナラズは 5-2. で規定した意味を表わすのみである。これと構文の意味との区別をはっきりさせることが必要である。

### 6-2. 「一回的文脈」と「反復的文脈」

3. で論じたように、国広他(1982)は、キットが「既成の一回的事実」に使えるのに対し、カナラズは使えないとした。また森本(1994)は、キットは過去平叙文で習慣的機能を表わさないとした。(4a)が成立する理由は、キットが「結婚した」という命題内容と呼応するためではなく、「～んですよ」という話し手の判断と呼応するためである。現在文の場合は、カナラズも「一回的文脈」の場面で使える。

さて、森田(1989)は、カナラズの意味を二種類に分けた。

かならず [必ず] 副

例外や当たり外れが一切なく、間違いなくその状況が成立すること。

☐ ある条件を設定して、その条件が成立するときは例外なく、常にある結果が成立する場合。(略)「朝になれば必ず日が昇る」「ワクチン注射をすれば必ずなおる」(略)

☐ “まちがいなくきっとそうなるはずだ”という話し手の強い断定を表すようになる。しかし、これは個別的な出来事に用いるので、結果によっては話し手に責任が帰せられる。「今

度の試合は必ず勝ってみせる」とは言っても、負けることもありうる。それは当人のみが信じる必ずで、☐のような客観性を持たない。このような「必ず」は「きっと」との置き替えが可能である。(略) (森田 1989: 332)

森田(1989)は自然法則、論理、習慣等と関わる「習慣的用法」を表わす☐と「個別的な出来事」を表わす☐とに分類した。この二つの用法は、本稿の冒頭に示した辞書の記述とも重なるものである。カナラズは「間違いない」という中心的な意味を持ちながら、反復的文脈と一回的文脈とでは、そのさし示す内容を異にしているのである。

### 6-3. 「一回的 / 反復的文脈」と「推量的 / 習慣的機能」との関係

本節では一回的文脈および反復的文脈において、各文がどのような機能を持つのかをみていく。まず、現在文の例からみていこう。

(24a) 今日の対戦相手ならカナラズ勝つ。

(24b) 彼は将棋を指せばカナラズ勝つ。

(24a)は「一回的文脈」の例である。この場合、一回性の事象であるから、「習慣的読み」にはなりえず、「推量的読み」にしかならない。一方、(24b)は「反復的文脈」の例であり、「習慣的読み」になる。場面によっては「推量的読み」も加わる。ここで注意したいのは、「推量的機能」と「習慣的機能」とは相互排他的なものではなく、互いに独立した機能だということである。この二つの機能は、各々の「構文」に備わっているものであって、場面によって二つとも選ばれることもあれば、いずれか一つしか選ばれないこともある。

ここで先の2文を過去文に変えてみよう。

(25a) ?昨日の対戦相手ならカナラズ勝った。

(25b) 彼は将棋を指せばカナラズ勝った。

すると、(25a)は(24a)と同じ理由で「習慣的読み」にはならない。ひいき選手の試合結果を予想するような「推量的読み」をする場合は、「～勝っただろう」のように文末は現在形を取る方が自然である。一方、(25b)は自然な読みでは「習慣的読み」にしかならない。場面によっては「推量的読み」も加わるが、これも文末は現在形を取る方が自然である。

次にキットの例をみてみよう。まず現在文の場合から。

(26a) 今日の対戦相手ならキット勝つ。

(26b) ?彼は将棋を指せばキット勝つ。

「一回的文脈」の(26a)では、「推量的読み」のみになる。一方、(26b)は「反復的文脈」の文としては不自然な文となる。(ただし(26b)は、「一回的文脈」であるとすれば、自然な文として解釈できる。その場合、「推量的読み」となる。)

(26b)に「習慣的読み」を持たせることは、森本(1994: 75)にあるように、一般的な用法では

ない。一般には、キットの代わりにカナラズもしくはキマッテ等の副詞を使う。劉(1996: 45)は、キットには習慣的機能はないとしたが、(26b)の文はこの指摘を裏付けている。

それでは(26a)(26b)を過去文に変えたらどうなるであろうか。

(27a) ?昨日の対戦相手ならキット勝った。

(27b) ?彼は将棋を指せばキット勝った。

「一回的文脈」の(27a)では、「推量的読み」のみとなるが、文末は「～勝っただろう」のように現在形を取る方が自然である。一方、「反復的文脈」の(27b)では、「習慣的読み」になるが、先の(26b)と同様に、不自然な文となる。

#### 6-4. タブンとタイテイ

本節では、前節にならってタブンとタイテイについてみていくことにする。まず、現在文の例からみていこう。

(28a) 今日の対戦相手ならタイテイ勝つ。

(28b) 彼は将棋を指せばタイテイ勝つ。

(28a)は「一回的文脈」の例である。この場合、一回性の事象であるから、「習慣的読み」にはなりえず、「推量的読み」にしかならない。一方、(28b)は「反復的文脈」の例であり、「習慣的読み」になる。場面によっては「推量的読み」も加わる。

ここで先の2文を過去文に変えてみよう。

(29a) ?昨日の対戦相手ならタイテイ勝った。

(29b) 彼は将棋を指せばタイテイ勝った。

すると、(29a)は(28a)と同じく「習慣的読み」にはならない。ひいき選手の試合結果を予想するような「推量的読み」をする場合は、「～勝っただろう」のように文末は現在形を取る方が自然である。一方、(29b)は自然な読みでは「習慣的読み」にしかならない。場面によっては「推量的読み」も加わるが、これも文末は現在形を取る方が自然である。

次にタブンの例をみてみよう。まず現在文の場合から。

(30a) 今日の対戦相手ならタブン勝つ。

(30b) \*彼は将棋を指せばタブン勝つ。

「一回的文脈」の(30a)では、「推量的読み」のみとなり、「反復的文脈」の(30b)では、非文となる。(ただし、(30b)は「一回的文脈」であるとすれば、「推量的読み」が可能となる。) (26b)が何とかいえそうであったのに対し、(30b)はいえないところから推察すると、キットとカナラズの類義性よりもタブンとタイテイの類義性の方が低いのかもしれない。

それでは(30a)(30b)を過去文に変えたらどうなるであろうか。

(31a) ?昨日の対戦相手ならタブン勝った。

(31b) \*彼は将棋を指せばタブン勝った。

「一回的文脈」の(31a)では「推量的読み」のみとなるが、文末は「～勝つたらう」のように現在形を取る方が自然である。一方、「反復的文脈」の(31b)では(30b)と同様に非文となる。

以上、キット/カナラズにみられる現象が、タブン/タイテイにも並行的にみられることが分かった。また、キット/カナラズの類義性の方がタブン/タイテイの類義性よりも高いことも分かった。

## 7. キットとカナラズの連続性

### 7-1. カナラズの二つの意味

本稿ではカナラズの意味は一つで、「命題内容の状況が確実に成立することを表わす」と考える。それが、事態が複数回行われるという反復的文脈では、その事態の発生する「頻度」が極めて高く、いつでも確実に成立することを表わすようになる。事態が一回しか行われない一回的文脈では、その一回の事態が確実に成功することを表わすようになる。この場合、二次的に話し手の強い断定、すなわち「話し手の命題の成否に対する確信度が高い」という意味合いを伴うようになり、キットと意味的に連続してくる。キットは「話し手の主観的な判断の確信度が高いこと」を表わす。これはあくまで話し手の真偽判断の確信度を表わすものであり、命題内容の「頻度」を表わすものではない。

例文(1)でキットとカナラズの入替えが可能なのは、それが一回的文脈であるためである。ただし、入れ替えても全体の意味は変わらないが、それぞれの副詞の呼応する成分は変わる。元の文では、キットは「会える」の無形のモダリティ成分と、カナラズは「会ってみせる」と呼応するが、2語を入れ替えた文では、カナラズは「あの女に会える」と、キットは「みせる」の無形のモダリティ成分と呼応するようになる。

### 7-2. 「蓋然性」と「頻度」

ここまでに、キットとカナラズは呼応する成分の階層が違うことを指摘してきた。ここでは、それぞれの語と同じような呼応関係を持つ語を挙げることにする。次の例文をみてみよう。

(32a) 天気予報はカナラズ当たる。

(32b) 天気予報はタイテイ当たる。

(32c) 天気予報はイツモ当たる。

(32d) 天気予報はトキドキ当たる。

(32e) 天気予報はマレニ当たる。

(33a) 天気予報はキット当たる(だろう)。

(33b) 天気予報はタブン当たる(だろう).

(33c) 天気予報はモシカスルト当たる(だろう).

(33d) 天気予報はアルイハ当たる(だろう).

(32)と(33)を比べると、(32)の各副詞が天気予報の「的中率」を表わしているのに対し、(33)の各副詞は話し手の「確信度」を表わしていることが読み取れる。この違いは、(33)において「だろう」を取り去ると容認度が落ちるのに対し、(32)は「だろう」がなくても自然な文として判断できることから分かる。

また、(32)の各文が「天気予報がカナラズ当たるコト」のように、コトの内部に入れられるのに対し、(33)の各文はコトの内部に入れると、「\*天気予報がキット当たるコト」のように非文となってしまう。このことから、(32)と(33)では呼応するモダリティ成分が異なっていることが証明される。

ところで、(27)におけるイツモ、トキドキ、マレニは、中右(1980)の「頻度の副詞」に相当する。これらとカナラズ/タイテイとの違いは、次の例文における容認度の違いから知ることができる。

(34a) 星がたくさん出ている日の翌朝は、カナラズ/タイテイいい天気だ。

(34b) 星がたくさん出ている日の翌朝は、イツモいい天気だ。

(35a) 星がたくさん出ているから、明日はカナラズ/タイテイいい天気だ。

(35b) \*星がたくさん出ているから、明日はイツモいい天気だ。

「反復的文脈」では(34a)も(34b)も成立するが、「一回的文脈」では(35a)は成立しても、(35b)は成立しない。カナラズとタイテイは、この点で「頻度の副詞」と性質を異にする。

ここまでの考察により、次のような副詞の階層のあることが分かった。

キット、タブン等……よりモダリティ的(蓋然性)

カナラズ、タイテイ等……中間的

イツモ、トキドキ等……より命題的(頻度)

蓋然性および頻度について論じる場合、同じ階層のもの同士を比較する必要がある。ただし、キットとカナラズ、カナラズとイツモは完全に切り離されたものではなく、文脈によっては入れ替えても文全体の意味にほとんど差の感じられない場合もある。キットの類の副詞とイツモの類の副詞はカナラズの類の副詞を仲介として、モダリティ的に連続しているといえよう。

先に4-2.において文代名詞化のテストを行った。ここでは、キットは「それ」に含まれていなかった。それでは次の例文の場合はどうであろうか。

(36) 百年、わたくしの墓のそばにすわって待っていてください。 きっと会いに来ますから。

(夏目漱石「夢十夜」)

ここで「それは本当ですか。」と尋ねたとすると、この「それ」には「キット」が含まれるよう

に感じられるであろう。(15a)と(36)との違いは、「来る」の動作主の人称の違いに求めることができる。(15a)のように第三者が動作主の場合と違って、(36)のように話し手自身が動作主の場合、キットは真偽の蓋然性の高さというよりも、話し手の強い断定を表わすようになる。この点で一回的文脈のカナラズと近い意味を表わすようになり、文代名詞化のテストにおいて、カナラズと同じ性質をみせるのである。

なお、キットには次のような命令文における用例もある。

(37) おまえは大きくなったらきっと安全ですばらしいのりものを発明しておくれ。(手塚治虫「魔法屋敷」)

これは森本(1994)にあるように、話し手の期待を強調するものである。

## 8. ま と め

最後にキットとカナラズの違いをまとめておく。

キット……真偽判断のモダリティを表わす副詞

話し手の主観的な判断の確信度が高いことを表わす

カナラズ…「真偽判断の副詞」と「頻度の副詞」の中間に位置する副詞

命題内容の状況が確実に成立することを表わす

- ・「一回的文脈」では「真偽判断の副詞」と連続する

- ・「反復的文脈」では「頻度の副詞」と連続する

(タブンはキットよりも、タイテイはカナラズよりもその表わす蓋然性は低い。)

本稿ではキットとカナラズが異なるモダリティ階層に属することを指摘し、その意味の違いについて考察を進めてきた。また、この2語にみられる性質がタブンとタイテイにも並行してみられることも観察してきた。しかし、それぞれの語の意味記述はこれで全てが終わったわけではない。今後、関連するさまざまな副詞を視野に入れ、それらの体系化を行うことが必要となってくる。それにより、個々の副詞の意味記述もより精密なものとなっていくであろう。

## 参 考 文 献

- 国広哲弥・柴田 武・長嶋善郎・山田 進・浅野百合子(1982)『ことばの意味3』,平凡社。  
 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』,岩波書店。  
 中右 実(1980)「文副詞の比較」,国広哲弥編『文法』日英語比較講座第2巻:157-219,大修館書店。  
 橋本進吉(1959)『国文法体系論』,岩波書店。  
 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』,くろしお出版。  
 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』,角川書店。

- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版.
- 山田孝雄(1936)『日本文学概論』, 宝文館.
- 劉 婧(1996)『陳述副詞の研究——話し手の確信度を表す副詞を中心に』, 名古屋大学1995年度修士学位論文.
- 渡辺 実(1974)『国語文法論』, 笠間書院.